

令和 6 年 7 月 8 日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02267

研究課題名（和文）地域子育て実践における「親理解」の学び

研究課題名（英文）Learning Understanding Parents In Regional Childrearing Support

研究代表者

井上 大樹（INOUE, Hiroki）

札幌学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：00638281

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では大都市の実践Aと小都市の実践Bについてフィールドワーク及び半構造化インタビューを行い、地域子育て支援拠点における「参加者」から「実践の担い手」への学習過程について検討した。

実践Aにおいては、子育ての問題や「子育ての困り感」をより普遍的なレベルで理解しようと努め、参加者である親と共に、スタッフ自身も苦悩しながら、「共に子どもを育てていく」という意味において、「集団的な子育て主体が形成されてきた」と結論づけた。

実践Bでは、子育て期の親は、公民館職員の後押しにより、家から一步を踏み出し、地域の中で人や場に出会い、語り合う中で、気づきや人とのかかわりが生まれている様子が見られていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、個人的関係や個別の取り組みに焦点をあてるのではなく、地域の子育てに関わるネットワーク（協同・協働的關係）による地域の子育て環境の変化に着目する点が類似の研究とは異なる点である。量質ともに充実しつつある「こども食堂」による子育て支援は、子どもの貧困に着目しつつも、他の子ども、子育て家庭と対等に結びつけることを志向している。地域においてあらゆる子育て家庭と「見える関係」として共存する可能性をこれらの実践では見出せる。これらの地域子育て支援実践ではケアと学びが結びつくべく親（当事者）理解が深まると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the learning process of transformation from "participants" to "practitioners" in local child-rearing support centers, using Practice A of the large city and Practice B of the small city, with field work and semi-structured interviews.

It became clear that Practice A continues to try to understand child-rearing problems and "child-rearing difficulties" at a more universal level. Through the practice, the staff themselves struggled with the parents who participated, and concluded that "a collective child-rearing entity has been formed" in the sense of "raising children together."

In the case of Practice B, the parents of young children observed in the case studies stepped out of their homes, met new people and discovered new places in the community. They were seen having interactions with others through dialogue and gaining insights, with the encouragement of the community center staff.

研究分野：教育学

キーワード：親の自己理解 親のエンパワーメント アドボカシー ケアと学び 居場所と学び

## 1. 研究開始当初の背景

地域子育て支援・実践における親のエンパワメントと効果的な支援の理論化はすでに保育学及び社会教育学でも研究が進んでいた。しかし保育学においてはあくまでも個別実践における支援者対利用者(親など)のケア的関わりが対象である。また、これまでの社会教育学における研究や研修プログラムの開発では、家庭教育に資することも視野に入れつつ、親以外の大人も地域の子どもに関わることを意識啓発し、この先は保育学同様個別実践における支援者と親の個別関係の構築に主眼がおかれている。また、男女共同参画の視点からの学びは、ジェンダーからの解放によって親を一人の人間として認めるという意識啓発の一方、精神的相互依存を本質とする近代家族の無条件の捨象は、「わが子によりそいたい」という子育てに関する人間的欲求を否定することになりかねず、「一人の人間としての欲求(自己実現など)」と「子育て者としての欲求」の葛藤の否定こそ親を一人の人間としてまると認めていないことと同義である。

また、現代の親はマスメディアやSNS、周り(近所、通わせている学校・園、習い事など)の「空気」を読む「生きづらさ」を抱えている。2003年に立ち上げられた日本社会教育学会第49回研究大会ラウンドテーブル「子どもに関わるおとなの学び」では、2000年代半ばからの「集いのひろば事業」の拡充とともに、現象的には子育てネットワークの活動が停滞したかのように見えるが、子育てネットワークの機能と役割の変化があり、乳幼児の親に直接的に関わる事業から、地域で協同的に子育てをする事業に関わる、親たちを含むスタッフたち同士がつながる機能へとシフトしてきたことが明らかになった。今後の課題として、地域における子育て支援・実践の現場において、支援者(親以外の大人)と親が関係を深めるのに、こういった学び合いがあるのかを社会教育実践として解明する必要があることが確認された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、団体・機関(ネットワーク)が行う地域子育て実践に内在する子どもに関わる大人(住民など)の「親理解」を深める学習を明らかにすることである。特に、現在の親が抱える、経済・職業的責任、家族・精神的責任、地域・社会的責任の重圧とすべてを抱え込むことで深刻化する葛藤の理解、及び親への関わりがそれらの葛藤の乗り越えに寄与するに至るまで高められた地域子育て実践に内在する学習に着目する。中でも、子育てに対する信念とも結びつき、親を評価する基準になる「親理解」に焦点をあてる。

本研究では、個人的関係や個別の取り組みに焦点をあてるのではなく、地域の子育てに関わるネットワーク(協同・協働的關係)による地域の子育て環境の変化に着目する。地域においてあらゆる子育て家庭と「見える関係」として共存する可能性をこれらの実践では見出せる。これらの地域子育て支援実践ではケアと学びが結びつくべく親(当事者)理解が深まると考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究では、団体・機関(ネットワーク)の一連の事業を通じ、親と周りの関係がケアする、されるから親理解にもとづいたエンパワメントとアドボガシー(代弁)が展開される転機となる学習がどこに存在し、親と他の大人の相互理解の深まりによる「親理解」の意識変化がどのようにもたらされるかをNarrative Approachによって明らかにする。

そのためには各構成員へのインタビューと資料収集から、当該団体・機関へ参加することによって各構成員が紡ぐ「物語」と共有している経験、価値観についてそれぞれの実践に即して仮説を組み立てる。続いて、転機になる学習が行われていると考えられる事業の事例検討を行うことで、当該団体・機関への参加による構成員の「親理解」の学習過程を解明することとした。

特に、親をどのような存在として理解するかという「親理解」を三つの側面から分析する。地域に子育て実践に即すると「親理解」は事実、意味づけ、価値観の3つの側面があると考えられる。住民の「親理解」に関わる言説は社会的自立に絡めたものが多く、この三つの側面である「経済的」(仕事に就いて安定した収入を得る)、「精神的」(離家をして新しい家族をつくる)、「社会的」(地域・社会・世界に主体的にかかわる)自立とも対応していると考えられる(表1)。よって、親の自己責任は、経済・職業的責任(家族を養う収入を得るまで働ける)、家族・精神的責任(家族のつながりを維持し自分事として関わる)、地域・社会的責任(子どもを含む家族が外で迷惑をかけないように折り合いをつける)の三側面があると考えられる。この責任が他の大人(他の親、住民など)と分かち合えることが対等な協力関係を築ける前提条件であると考えられる。

表1 「親理解」の三側面

視点\側面	経済的	精神的	社会的
社会的自立	就労	離家	参加
親(自己責任)	家計	養護	しつけ
地域子育て実践	事実	意味づけ	価値観

#### 4. 研究成果

本研究では東日本の大都市の実践 A と西日本の小都市の実践 B についてフィールドワーク及び半構造化インタビューを行い、地域子育て実践に内在する子どもに関わる大人（地域住民など）の『親理解』が深まる学習を明らかにした。

東日本の大都市の実践 A に対して、地域子育て支援拠点における「参加者」から「実践の担い手」への変容論理についてスタッフ 6 名への半構造化インタビューを行った。実践 A においては、子育ての問題や「子育ての困り感」をより普遍的なレベルで理解しようと努め、それらの問題や困り感を乗り越えようとする実践が継続されていることが明らかになった。実践を通し、参加者である親と共に、スタッフ自身も苦悩しながら、「共に子どもを育てていく」という意味において、「集団的な子育て主体が形成されてきた」と結論づけた。

実践 A の特徴は、「仲間で支えあいながら行う子育て」の「参加者」から「担い手」へのプロセスに、「子育ての困り感」を持つ／持っていた者同士というつながりに根拠をもつ参加者とスタッフの対等性を堅持していることにある。さらには、一人ひとりの意見を受容しながら展開される話し合い学習によって深まった相互理解は、「子育ての困り感」を地域の協働性を高めることにつながっている。その結果、実践 A に関わる人々が何らかの形で「人と人がつながりあい、支えあいながら、未来をつくる子どもを地域で育てていく」営みに参画し、継続する中で学びによって実践 A の「子どもたち」の育ちを見守り、支える「担い手」が形成されたとと言える。

西日本の小都市の実践 B からは、社会教育施設としての公立公民館の具体的実践から子育て期の親の学びについて資料収集及び現在の「担い手」への半構造化インタビューによって検討をすすめた。実践 B では、公民館の子育て講座の参加から子育てサークルの担い手へに移行する過程に着目した。

まず、第一段階として疎外や閉塞状況の中で子育てしている親たちが家から一步を踏み出し、公民館の子育て講座に参加し、子育て主体として成長していくプロセスを見ることができた。その子育て講座は、まず参加前の段階では、公民館に親子をいざなう広報「公民館だより」の工夫で働きかけ、参加し始める段階になると、体験型講座や随所にちりばめられた人とかかわるしくみにこだわり実施されていた。その後、公民館職員の後押しにより、家から一步を踏み出し、地域の中で人や場に出会い、語り合う中で、気づきや人とかかわりが生まれている様子が見られていた。その子育て期の親が、引き続き子育て講座に参加し続けていきつつ、公民館職員の後押しを受けながら、子育てサークルを立ち上げていく過程、並びにその支援の在り方をとらえた。

実践 B では、公民館職員という社会教育専門職の伴走を受け、「孤立や不安を抱く」現状から「家から一步を踏み出す」（子育て講座に参加する）ことで、話し合い学習を通じ参加者同士の相互理解、講座企画委員に入ることによって「担い手」への経験を蓄積することになる。「担い手」になっても話し合い学習を継続することで、子育ての主体になることが他の子を含む「地域での」子育ての主体になることと同義であることを学ぶ。そのことが、親が話し合い役割を担いあうというサークルなどの自主活動を生み出し、伴走していた公民館職員からも「自立」して地域子育ての「担い手」への力量を形成していくことにつながっている。

これら二つの実践の共通点として、親の主体性が発揮されている地域子育て実践、すなわち実践の位置づけとして親を地域づくりの主體的担い手としていく志向が強いことがあげられる。担い手になりゆく親の「自己理解」は、一連の実践による経験や学びを通して自己認識、自身の課題解決から形成される。だけでなく、取り組みのみならずスタッフ同士、スタッフとマネジメント側（公民館職員など）との関係に対等性、協働性が重要視されていれば、「親理解」に対して共感性の高い、「地域の」子どもたちという視点が確立されていることが明らかになった。そのプロセスでは参加者やスタッフ一人ひとりの思いを尊重する話し合い学習を重ねる中で、子育ての悩みや困難が「自分事」として共有されるプロセスも二つの実践に共通して見られた。つまり、子育ての協働的社会化をめざす実践及びそれを実現させるための学びに「担い手」となる親の「親理解」に地域視点が定着する可能性が十分にあると言える。そのプロセスは表 2 のようにまとめられる。

表 2 地域子育て実践展開と「親理解」

実践の質	提供	請負	改良（自主化）	協同	創造
親の自己理解	利用者（保護者）	子育て啓発者	実践参画者	調整者	実践 C 担い手
親の「親理解」	自「親」中心	自子中心	「子ども」中心 （他子認識）	葛藤	地域視点 （他子理解）

今後の課題として、地域における子育て支援・実践においても一方の軸となる支援者（親以外の大人）が、親などと関係を深めるのに、こういった学び合いがあるのかを社会教育実践として解明する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大坂, 祐二	4. 巻 12
2. 論文標題 子育ての社会化・市場化・共同化をめぐる先行研究の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名寄市立大学社会福祉学科研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋, 晴子	4. 巻 59-2
2. 論文標題 公民館における子育て期の親の学びとその支援について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋, 晴子	4. 巻 60-1
2. 論文標題 公民館における子育て期の親の学びとその支援について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 九州女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 榊, ひとみ	4. 巻 115
2. 論文標題 地域子育て支援拠点における「参加者」から「実践の担い手」への変容論理	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 札幌学院大学人文学会紀要	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	宮嶋 晴子  (MIYAJIMA Haruko)  (20598122)	九州女子短期大学・子ども健康学科・教授   (47106)	
	榊 ひとみ  (SAKAKI Hitomi)  (30757498)	札幌学院大学・人文学部・准教授   (30103)	
	大坂 祐二  (OSAKA Yuzi)  (70289677)	名寄市立大学・保健福祉学部・教授   (20104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------